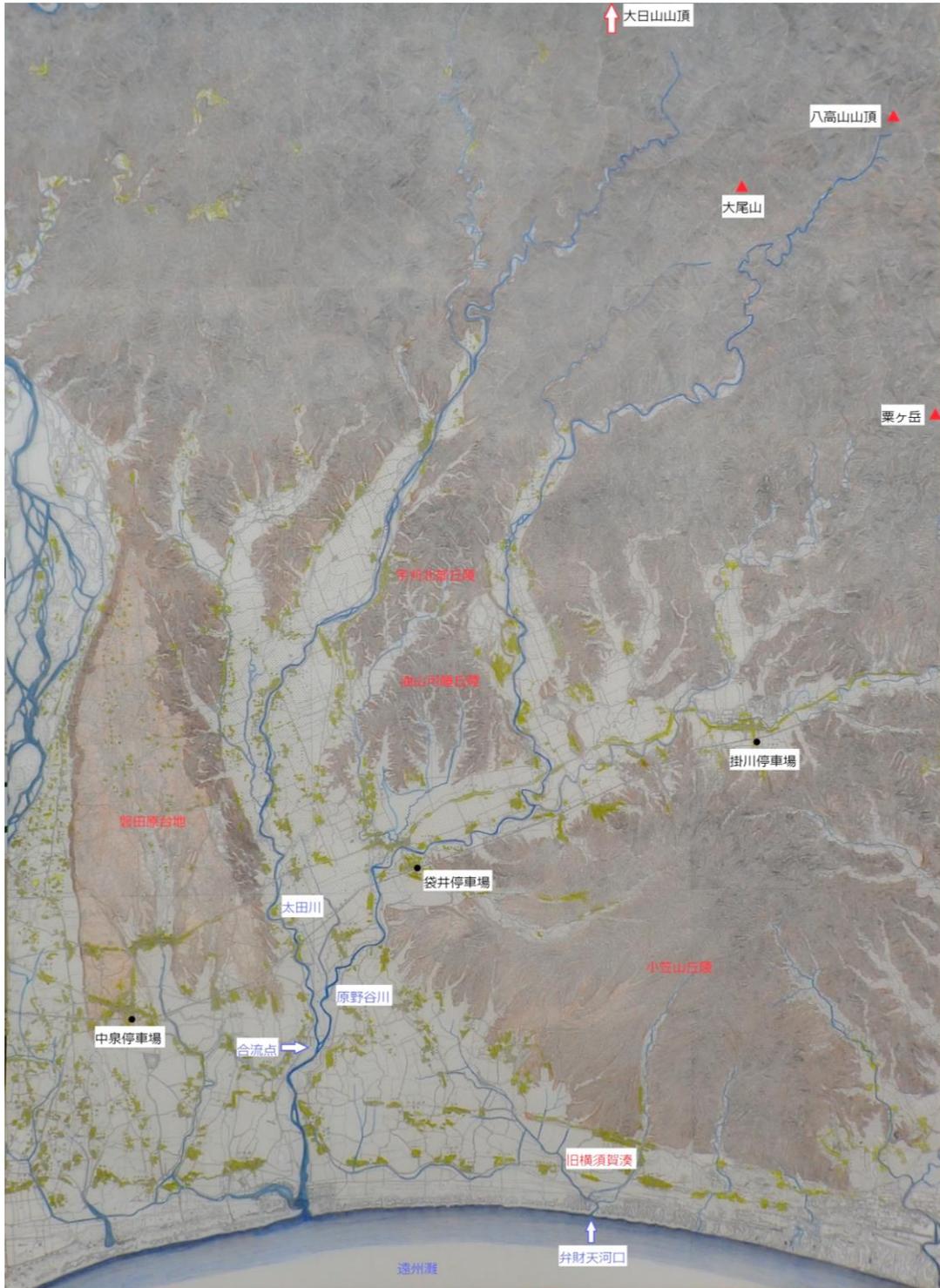


ひら  
袋井を拓く —太田川・原野谷川の合流と治水—



130 年前の姿

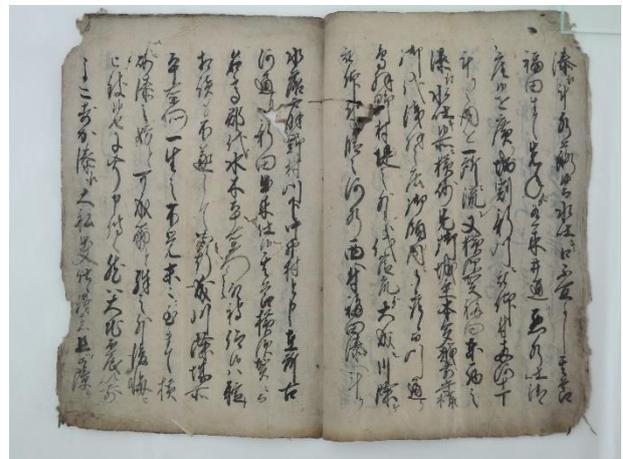
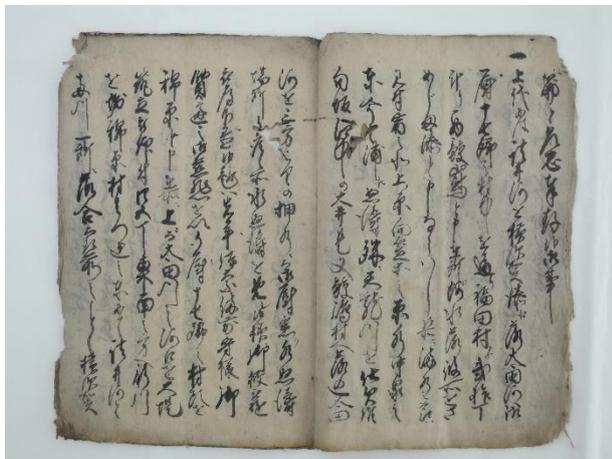
国土地理院の前身である大日本帝国陸地測量部(1888年成立)が明治23年(1890)に測量を行い、明治25年(1892)に発行した2万正式図の「山名町」「横須賀村」などを合わせて丘陵部・山、河川を色分けし、原野谷川・太田川流域の範囲を示した。現在の袋井市域はこの両河川が形成した平野部と、これを取り巻く台地・丘陵によって形成されている。明治22年(1889)7月1日に新橋・神戸間で全線開通した東海鉄道(現在のJR)の路線も記されている。

袋井市域の両河川は高低差が殆んどない平野部を流れるため蛇行し、たび重なる洪水により流域の人びとを悩ませ続けた。しかも両河川は決して交わることのない川であった。しかし、現在は二瀬という地点で合流し、遠州灘に直接注ぎ込んでいる。これは徳川幕府成立と同時に遠州海岸平野の大規模改造がおこなわれた結果であった。

## 第一章 「平右衛門が一生の不覚…」

徳川家康が関ヶ原の戦いに勝利を収め慶長8年(1603)に幕府を開いた翌年、幕府代官頭として遠江支配に関わっていた伊奈忠次を総責任者として遠州惣検地を始め、同時に太田川と原野谷川を合流させ、新しく川筋を掘って遠州灘に直接注ぐよう流路を付け替える大普請(工事)が行われた。その排土を用いて川筋に沿って東西両側に大堤(浅羽大堤・御厨大堤)が築かれ、浅羽之庄、鎌田御厨と呼ばれる輪中が形成され、海岸平野における新田開発がこののち本格化したと評価されてきた。

ところが森町村の百姓惣太夫が元文4年(1739)霜月26日の日付で目安箱に投じたと考えられる訴状の写し(「湊整備要望願」)には、特に本多越前守の工事(延宝8年高潮災害後)が悪かった、と書かれている。遠江唯一の良湊であった横須賀湊入口に堆積する砂を吐き出すような川の流が来なくなり、地震隆起も重なって、掘削を繰り返すもすぐに塞がり、これが原因で湊機能が失われ、浅羽之庄には悪水が溜まるようになり甚大な被害がたびたび生じるようになったという顛末を詳細に記す。本多越前守の大普請に関して、当時の横須賀藩の郡代であった水木平右衛門の「平右衛門が一生の不覚として、末代に至るまで、横須賀湊の妨げになるであろう」という後悔の言葉を伝えている。



「湊整備要望願」元文四年(1739)の訴状の写し 個人蔵

元文4年(1739)11月26日に、森町村の百姓惣太夫が江戸の奉行所へ出した湊整備要望願の写しと見られる。治水は関係各村の利害が絡むので、領主が明確に方針を定めないと工事が進まないこと、本多越前守が横須賀城主の時に川を西に付け替え、福田湊に水を落としたことによって横須賀湊が使えなくなったこと等の損害を訴えている。

なお、第一章のタイトルとなっている「駈と相談も不遂して、如斯成川除場所、平右衛門一生之不覚末ニ至まで、横砂湊之妨と可成筋」という発言は、水木平右衛門が、本多越前守の工事を止められなかったことを嘆いて言っているものらしいから、水木平右衛門は福田湊にばかり水が行く工事には反対だったらしい。

## 第二章 両河川の氾濫と戦国期の治水

小笠山丘陵南西裾部の海岸低地には、約6000年前に起こった縄文海進の、なごりの潟湖(ラグーン)が規模を狭めながらも江戸時代後期まで残り、そこへ原野谷川・三沢川・西大谷川などの中小河川が注ぎ込んでいた。

原野谷川・太田川の両河川は高低差の殆どない海岸低地に入ると大きく蛇行して流れ、洪水を度々引き起こし、流域は池や沼が広がる湿地帯だった。摂関家領として12世紀代に成立した浅羽荘は潟湖を取り囲む範囲に広がり、のちに遠州唯一と言われた「横須賀湊」を前提とする水上交通の要衝であったと考えられ、この時に浅羽低地を東西に横断する中畦堤(なかうねづつみ)が設けられている。

この湿地帯への新田開発は戦国大名の今川氏によって16世紀中頃から手を付け始められる。永禄4年(1561)の今川氏真の書状には「遠州所々新田の事」として8ヶ所の新田開発を行った地名が列記されている。この時の造成は低地に広がる大規模な池の悪水を吐かせるための排水路を掘り、運河として川船の往来を可能にし、舟入や新在家の設置、中畦堤の補修、原野谷川に沿った堤防、「古堤」の造成という基盤整備であり、これらは、遠江における最古級の「新田開発」事例であった。

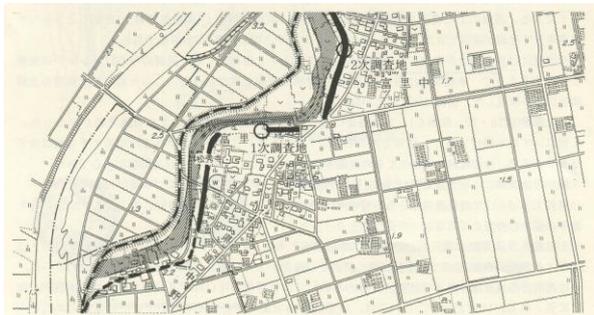
原野谷川を流れてきた仏たち  
 原野谷川流域には高尾下地と長溝の2カ所で洪水によって上流から流れ着いた仏を祀っており、その被害の凄まじさを物語っている。



毘沙門天像 平安後期～鎌倉初期 下地毘沙門堂  
 いわゆる割刳造の前側半身のみ流れ着いたもので、右画像は内面の内刳りを示している。像高 115 cm。



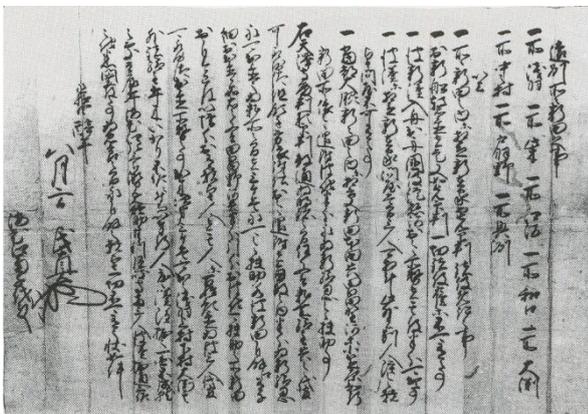
薬師如来立像 室町時代か 長溝院  
 霊木を刻んだ一木造で作仏聖によるものか、表面は擦り切れ所々に土が付着している。像高 164 cm。



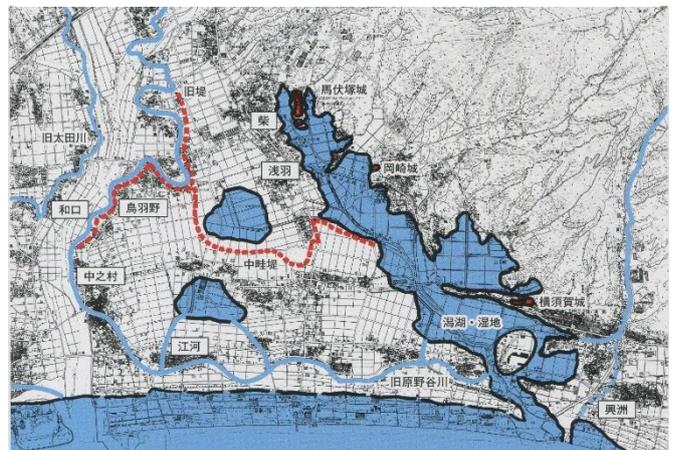
旧原野谷川に沿って築かれた「古堤(ふるづつみ)」  
 富里地区(鳥羽野村)には今川氏真時代の新田開発に伴う堤防(古堤/太線)が現在も約 1.3 km程残されている。古堤外側の網目が旧原野谷川の流路でさらに外側の破線が浅羽大囲堤でこの部分が現在唯一残されている。



発掘で出現した中畦堤(なかうねづつみ)の基底部  
 下水道最終処分場建設に先立ち 1996、97 年に実施した発掘調査で 13 世紀代に遡る可能性を持つ堤の基底部分を確認し、浅羽荘の開発に伴う可能性が高まった。



今川氏真判物 海老江文書 広島大学日本史学研究室所蔵  
 今川氏による新田開発を示す史料が2通残される。これは功績のあった海老江菊千代に宛てた永禄4年(1561)8月2日付けのもの。

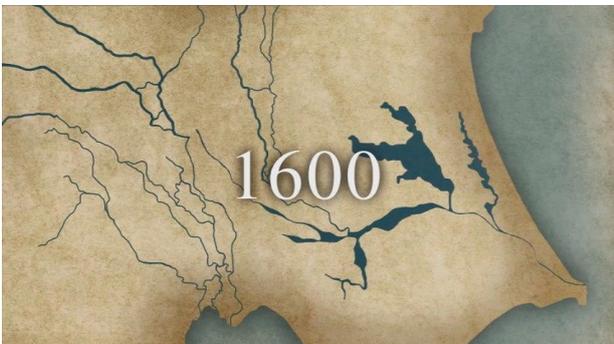


戦国時代の浅羽・横須賀低地の地形復元と新田開発の関係  
 16世紀後半の地形を復元した。原野谷川・太田川は合流せず横須賀湊入口で吐き出していた。枠内の地名は新田開発地。

### 第三章 江戸幕府代官頭 <sup>い なただつぐ</sup> 伊奈忠次

天文 19 年(1550)三河国に生まれる。徳川家康に仕え天正 17~18 年(1589~90)の五ヶ国総検地では実際の指導者として手腕を発揮し、豊臣秀吉から家康が関東への国替えを命じられると、江戸を拠点とすることを進言した。忠次は家康が抱えた 70 から 80 名いる代官の中で四本の指に入る大代官で代官頭と呼ばれた。武蔵国足立郡小室郷(埼玉県伊奈町)を中心に大名並みの一万石を与えられ、城郭のような陣屋を構えた。代官頭として検地、灌漑、治水、新田開発に手腕を発揮し、家康の財政基盤の確立と、関東支配の整備に多大な貢献を果たした。

検地のために領国を巡る中で、大河川の氾濫が造る広大な湿地帯の新田開発に乗り出し、人々の暮らしの支えとなる寺社を手厚く保護しながら民衆の心をつかまえていった。慶長 5 年(1600)家康が関ヶ原の戦いに勝利すると、翌年忠次は天下統一の地盤固めのため東海道の整備を命じられ、荷物取次のための伝馬制を作り、街道の各地に宿場町を造った。慶長 8 年(1603)幕府が開かれると利根川・荒川の治水を命じられたが、その手腕が遠州海岸平野の整備にも用いられている。このように多くの業績を残した忠次だが、慶長 15 年(1610)志半ばで病により逝去した。事業は後に初代関東郡代となる息子の伊奈忠治に引き継がれ、江戸の防水、防災、新田開発は現実のものとなり、関東平野は一大穀倉地帯となった。



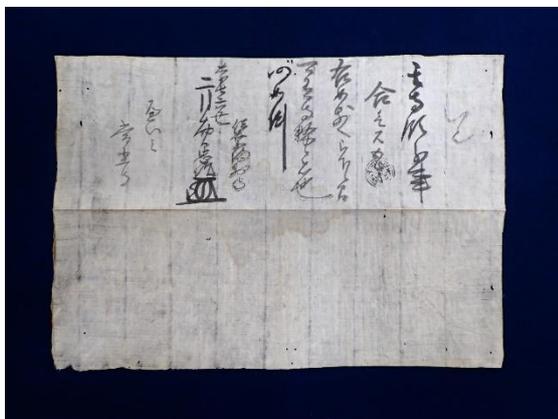
伊奈忠次、忠治親子二代にわたる利根川・荒川治水により利根川は江戸ではなく太平洋に注ぎ込むようになった。



伊奈陣屋復元図

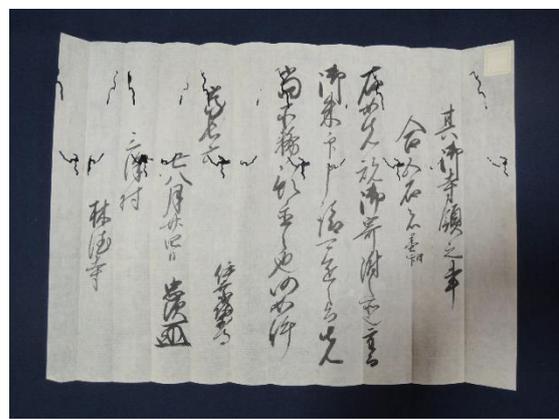
忠次は大名並みの一万石を与えられ武蔵国足立郡小室郷(埼玉県伊奈町)の小島のような高台に土塁と堀に囲まれた陣屋を構えた。地形測量や発掘調査により、伊奈忠次の築造した城郭のような陣屋の構造が明らかとなってきている。

※掲載の 3 画像は埼玉県伊奈町教育委員会制作 DVD「伊奈忠次」より引用



伊奈忠次寺領証文 (豊住 常楽寺文書)

慶長 6 年(1601)8 月 24 日発給 折り紙形式で原本である。



伊奈忠次寺領証文 (春岡 西楽寺文書)

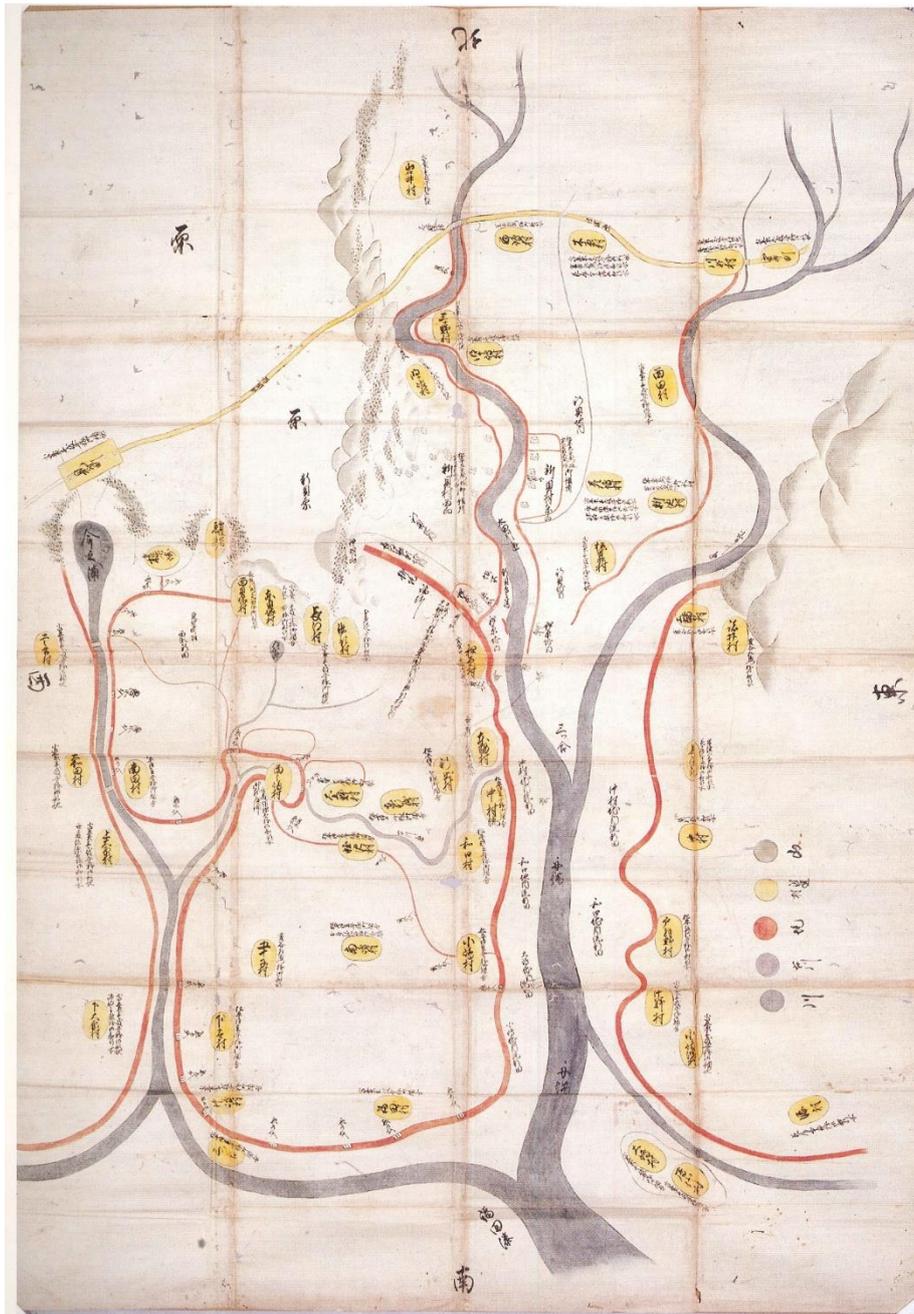
慶長 6 年(1601)8 月 24 日発給 西楽寺には末寺であった三沢村 林徳寺の同日付の寺領証文が 3 通残されており、これは原本の写しである。

## 第四章 原野谷川・太田川両河川合流と村の移転

伊奈忠次が実施した治水事業は、それまで各村個別に行っていたものを洪水などの情報を交換する「治水ネットワーク」でつなぎ、流域の住民が一つの運命共同体となり、自分たちで治水対策を行い、水田を守るというものだった。

徳川幕府が開かれた翌年、慶長9年(1604)から原野谷川・太田川の治水事業は始まったと考えられる。これは海岸平野を蛇行して流れる東側の原野谷川を長溝地先で閉め切り、西側の太田川は稗原地先で閉め切り、新たに両河川を合流させて遠州灘に直接注ぎ込むよう川筋を付け替えたもので、その状況は「今之浦川・太田川・諸井川(原野谷川)流域図によって具体的に知ることができる。

これにより原野谷川流域には33カ村からなる運命共同体、「浅羽之庄」と呼ばれる輪中が誕生し、太田川流域には17カ村からなる運命共同体、「御厨(みくりや)」と呼ばれる輪中が慶長3年以降の慶長年間(1604~1615)に誕生した。これにより新たに川筋となる長溝村・中村・大島村は川東に移転することになる。



今之浦川・太田川・諸井川(原野谷川)流域絵図 磐田市歴史文書館所蔵 縦168cm、横118cm  
中央右寄りに合流したあと南の福田湊から遠州灘に通じる原野谷川・太田川を描き、東側には浅羽大囲堤を、西側には御厨十七箇村を廻る御厨大囲堤を描いており、慶長年間の伊奈忠次による普請後の姿を具体的に知ることができる。

## 第五章 大囲堤と込樋造成

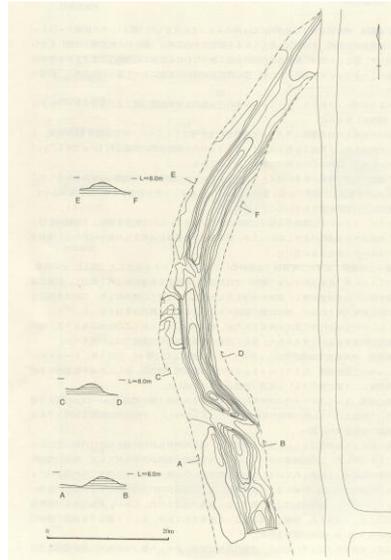
新たに付け替えられた原野谷川と南部の海岸地帯には旧原野谷川(現在の前川)の流路に沿って大堤が新たに設けられた。その範囲は、北は下諸井村の北側で小笠山山塊裾から原野谷川に沿って西浅羽を通り、海岸沿いでは前川(旧原谷川)に沿って豊浜(旧福田町豊浜)、さらに幸浦の東同笠(ひがしどおり)で北上して東浅羽東端の松山から潟湖を渡り、笠原の岡崎村外れまでの総延長 13 km に及ぶもので「浅羽大囲堤(あさばおおがこいづつみ)」と呼ばれ、この中に 33 カ村が存在する輪中が出現した。

大堤には用水、悪水の排水、潮除けのための込樋が大規模なものだけで 19 ケ所設けられて複数の用水組合、悪水組合によって管理された。なかでも潟湖を横断する江の端(えのはた)には八基の込樋が設けられたので「八艘」と呼ばれ、ここを利用する 24 カ村の組合により維持管理が行われていた。



長溝地先の大囲堤の復元ジオラマ

発掘調査によって、この部分の大囲堤は基底幅約 6~7 m、高さは 2.5~3 m の規模であることが判明した。東浅羽地区松山では基底幅が約 15m、推定高が約 5m なので、規模は統一されておらず高潮災害を受けやすい部分とそうでない部分では異なることも判明した。内側には杭を打ち土嚢を積んで補強していた状況も見つかっている。



浅羽大囲堤実測図

原野谷川・蟹田川合流点の河川改修工事によって消滅する長溝地先にわずかに残っていた浅羽大囲堤約 100 m 分の調査を 1996 年に実施した。堤は原野谷川が形成した自然堤防を利用している。これを土台にして地面を削り出し、その上に種類の異なる粘土層を交互に突き固めていた。



蟹田川合流地点に残る大囲堤(長溝)流路に沿って並行する堤は合流点では洪水時の保水量を増やすために大きく膨らめている。この地点はちょうどその変化点に相当する。



大囲堤の土層断面

堤防の調査は断面観察を重視する。土層の状況によりたび重なる改修を重ねていることが判明した。



浅羽大囲堤と八艘之込樋復元ジオラマ

浅羽大囲堤最大の難工事は入江を縦断する堤と悪水を吐き出す込樋を組み合わせた八艘坎(8基の込樋)であった。右の絵図に基づき込樋の一つを浅羽大囲堤と共に一基分のみ復元した。



「字江之端坎四拾分ノ壱図」 袋井市歴史文化館所蔵 江之端の木造入樋図で幕末~明治初期に画かれたものか。この図をもとに左の復元ジオラマを作成した。276mm×390mm。

## 第六章 延宝八年閏八月六日の高潮災害とその後

慶長年間の原野谷川・太田川合流工事で川筋が遠州灘に注ぎ込むよう付け替えられたことにより、大雨のたびに横須賀湊入口に堆積する砂を吐き出してくれた適度な勢いの水が来なくなり、次第に湾口を塞ぐようになっていた。そこへ延宝8年(1680)閏8月6日に江戸時代最大と言われる台風が襲い、中国地方から東海、関東、東北の広い範囲で大きな被害が生じた。江戸では午前8時頃から10時にかけて最も風雨が激しく、3420軒が倒壊、本所深川では700余人が溺死した。

浅羽・横須賀地域の詳細を記した記録に『百姓伝記』『横須賀根元歴代明鑑』『長溝村開発由緒書』があり具体的な被害を知ることができる。これらによると、潟湖に入り込んだ高潮は横須賀城外側で9尺(約2.7m)に達し、大囲堤は1984間(約3.6km)が大破し、江之端(八艘塚)の水門も2基打ち抜かれたので輪中一面に潮が入り込んで一面泥の海と化し、一月以上も潮が引かず8千石が腐ってしまったという。当時この周辺一帯は横須賀藩領で藩主は本多越前守利長だった。家中総動員で堤・塚樋の修復にあたるが、余りの悪政を理由に出羽国山形へ5万石から1万石に減封されたうえで改易された。延宝8年の高潮災害を契機に、大堤の外側に位置する大野新田と中新田では生き残った村人により、村の中央に高潮時の避難用の築山を築いた。これが現在も残る「県指定史跡 命山」である。

元禄11年(1698)6月には太田川方面からの洪水によって被害を受け、翌年8月には再び高潮によって大囲堤が切れ、海沿いの村では神社が流され御神体が行方不明になっている。宝永4年(1707)10月4日に発生した大地震によって浜名湖から西の海岸では高潮が発生し、東海道白須賀宿は壊滅的被害を受けている。浅羽・横須賀周辺では、地震によって潟湖が隆起し多くの部分が干上がっている。



『長溝村開発由緒書』をもとにした紙芝居 袋井市郷土資料館制作

『百姓伝記』の記載は「午前5時頃より風が吹き出し、午前10時頃には高潮が押し寄せ、多くの人馬が死亡、海はしけとなり、降る雨は海水のように塩辛く、打寄せる波は中一つが大きく、前後の波は小さかった。横須賀城惣曲輪前の中土居で波は止まった。城の西側の村は潮浸しとなり、なかでも東同笠(ひがしどうり)・大野新田・中新田・今沢新田には潮が強く当たり、この村では老若男女300人が死亡した。掛塚まで高波があったが、城の東側の村々はさほどの高潮とはならなかった」と記されている。



年不明12月7日付け〔松葉割付申付書〕 袋井市歴史文化館所蔵

弁財天川口の砂除(浚渫)のために、12月9日、10日に松葉を持ってこよう、担当の村と運搬量を割付けたもの。砂除のために、どのように松葉を使うのか、という点が気になるが、浅岡芳郎『横須賀湊と前川運河・福田湊』(私家版2017年)によると、工事中の砂崩れ防止に松葉を使用するのだと言う(p.72)。

状態が悪く、古文書を開くことすら困難だが、少しずつ写真を撮り、合成することで復元した。

## 第七章 太田川・原野谷川改修沿革

太田川、原野谷川は水源地(大日山・八高山)が三紀層の発達した粘土分を多く含む土質で、維新以前は森林が鬱蒼としていたが次第に濫伐の影響を受け、水源は枯渇し土砂流失の傾向が生じてきた。しかも上流の川幅は広いが、下流は狭く、暴雨の際には雨水が一時に落下し、下流は屈曲するので常に流水を妨げて氾濫を起こした。特に明治以降は洪水が頻繁に発生し、周辺の村々に多大な損害を及ぼした。なかでも明治43年(1910)は台風の影響もあり8月7日から10日まで雨が降り続き、河川は増水して各地を洪水が襲い大囲堤も2カ所で切れている。翌44年には8月4日から台風が襲い、天竜川から太田川流域での被害が多大であった。

兩年の災害を契機に大正2年(1913)に水害予防組合が設立され、抜本的な両河川の改修計画が立てられた。不規則に蛇行する川筋を整えて停滞する水を流し、各用悪水路には水門を設け洪水の侵入を防ごうという方針で、川幅や堤防についての基準を設け、さらに堤腹保護工や護岸工を施した。改修工事は第一次世界大戦、関東大震災の発生により事業の繰り延べや延長が行われ、昭和8年(1933)に至り完成し、これを記念した「一圓融合」の碑が昭和11年(1936)に西浅羽二瀬東橋の入口に設けられた。



昭和21年(1946)にアメリカ軍(進駐軍)が撮影した空中写真

日本での占領政策を実施した連合軍(進駐軍)は全国の主要な都市と郊外の空中撮影を実施し、現状分析を進めた。袋井もこの時に撮影が行われたものである。この画像は1946年当時の地形のみならず、黒く写り込んだ低地が中世～近世にかけての川筋や入江の水域を如実に反映しており、これを参考にして旧地形を復元することができる。中世以降の地形変化が近年まで大地に痕跡を留めながら、ほとんど変わらずに刻まれていることに驚きを感じる。

【参考文献】 『浅羽町史』浅羽町2000年、『図説浅羽町史』浅羽町2001年、『浅羽町郷土資料館特別展 遠州灘の高潮災害と二つの築山 一命山の築造とその周辺— 解説パンフレット』浅羽町郷土資料館2003年、浅岡芳郎『横須賀湊と前川運河・福田湊』私家版2017年、和泉清司『江戸幕府代官頭 伊奈忠次』埼玉新聞社2019年、『DVD伊奈忠次』埼玉県伊奈町教育委員会制作2019年。  
企画展開催期間：2019年10月29日～2020年1月17日 編集発行：袋井市歴史文化館 袋井市浅名1028(浅羽支所内)